

令和7年度 日野町 進取のまちづくりフォーラム 実施報告書

日野町まちづくり事例紹介

日野町まちづくり推進センター（仮称）の取組

01	02	03
新緑道のまちづくり 推進委員会 伊藤 隆雄	道のまちづくり 推進委員会 土田 隆雄	まちづくり推進センター 推進委員会 伊藤 隆雄
04	05	
道のまちづくり 推進委員会 伊藤 隆雄	道のまちづくり 推進委員会 土田 隆雄	

Content

- 002 進取のまちづくりフォーラム プログラム
- 003 1. 趣旨説明
- 004 2. 開会あいさつ・基調講演
- 009 3. アンケート調査および意見交換会のまとめ
- 011 4. 事例紹介
- 023 5. 個人ワーク・意見交換・発表
- 028 6. 総括
- 031 7. 閉会あいさつ
- 032 8. フォーラムアンケートから見えてきたこと

フォーラムの内容は町のYouTubeチャンネルで配信しており、資料は町のホームページに掲載しています。

日野町
YouTube
チャンネル



日野町
ホーム
ページ



進取のまちづくりフォーラム プログラム



■日時:令和8年2月1日(日)10:00~12:00

■会場:日野公民館ホール

■プログラム

1.趣旨説明 企画振興課

2. 開会あいさつ・基調講演 堀江町長

「むらの記憶 まちの未来 ~自治の原点を訪ねて~」

本日の事例紹介につながる問題提起として、自治の原点と現代的意義を共有。

3. アンケート調査および意見交換会のまとめ (株)農楽 西村俊昭

4. 事例紹介 進行:(株)農楽 西村俊昭

各自治会10分程度 × 5自治会

- 河原自治会— 自治会を一度立ち止まって見直す
- 上迫自治会— 役員以外も関われる「ゆるやかな参加」の仕組み
- 鎌掛運営会— 「運営」と「検討」を分けた体制づくり
- 安部居自治会— データ(根拠)をもとに将来を考える
- 西明寺自治会— 暮らし・農・人の関係性を大切にする地域づくり

それぞれの自治会が抱えた課題、工夫、乗り越え方を共有。

西明寺バンド演奏

地域のつながりを象徴する取組として、「西明寺山の音楽隊」による演奏。

5. 個人ワーク・意見交換・発表 進行:(株)農楽 西村俊昭

- ① 本日の感想をシートに記入
- ② 周辺の参加者と意見交換
- ③ 3名程度が発表

「聞くだけで終わらせない」ための対話の時間。

6. 総括 安田教育長

7. 閉会あいさつ 安田副町長

1. 趣旨説明 企画振興課



■フォーラム開催の背景

本フォーラムは、これまで実施してまいりました

- 自治会活動に関するアンケート調査
- 自治会活動に関する意見交換会
- 行政懇談会

などの場で寄せられた声を受けて開催するものです。

それらの中で、

- 少子高齢化の進行
- 担い手不足
- 行事や役割の負担増
- 運営の見直しへの不安

といった、自治会が抱えるさまざまな課題が共有されました。

特に、「課題への具体的な取組事例を知りたい」という声を多くいただいたことが、今回の開催のきっかけとなっています。

■目的

本日は、地域の将来を見据えた取組を実践されている町内自治会の皆さまから事例をご紹介します。

目的は、それぞれの自治会運営の参考としていただくことです。

正解を示す場ではなく、「自分たちの地域で何ができるか」を考えるきっかけの場として位置づけています。

2. 開会あいさつ・基調講演 堀江町長

本日お集まりの皆さまは、それぞれの自治会・地域で日頃からご尽力いただいている方々、そして何らかの問題意識を持って参加くださった方々だと思います。

この後、町内5つの自治会の皆さまから取組のご紹介があります。そちらが本日の中心です。私はその前段として、20分ほどお時間をいただき、最初にお話しさせていただきます。



■基調講演「むらの記憶 まちの未来～自治の原点を訪ねて～」



進取のまちづくりフォーラム

むらの記憶 まちの未来 ～自治の原点を訪ねて～

本日のテーマは、「むらの記憶 まちの未来～自治の原点を訪ねて～」です。私たちが暮らす日野で、自治会(地域)がどのように成り立ってきたのか。そして、なぜ今、私たちは自治会を続けているのか。その背景を、歴史の流れから皆さんと共有したいと思います。

日野の原点：古代から続く暮らしの土台

日野には縄文時代から人が住んでいます。これは、この地が古くから豊かな場所であったことを示すものです。弥生時代には稲作が始まり、日野の語源の一つに「肥野(ひの)」-肥えた野-という言い方も伝わっています。古墳時代になると豪族の時代となり、町内最大級とされる古墳など、地域の重要性をうかがわせる遺跡も残っています。

縄文時代(1万3千年前)弥生中期(紀元前100年頃)

【縄文】原初より動植物に恵まれた地
有舌尖頭器
【西大路・上野田・寺尻】
縄文土器【三十坪・村井】

【弥生】
出雲川や日野川沿いの肥沃な平地にムラが形成。人々が集まり定住し始めた。日野の語源の一つは「肥野」






古墳時代(西暦200~600年頃)

【大塚】日枝社古墳：町内最大首長級
【日田・音羽・佐久良・内池・小御門
増田・石原・十禅師・松尾・上野田】

広範囲に数多くの古墳や集落が形成。堅穴住居や孤立柱建物も。役人の出先機関や官人宅も増えるなど、豪族が増え始め、日野の地域は重要地に。





「必佐」と「条里」：自治の地盤がつくられた時代

飛鳥時代には、天智天皇が蒲生郡置込野(ひさの)で遷都の視察を行ったことが『日本書紀』に記されています(十禅師一帯とされる地域)。また、渡来人の受け入れなど、当時の最先端の技術や文化が入った重要地域だったことも示されています。奈良時代には律令体制が整い、蒲生郡の中で「必佐」という言葉が早くから現れます。あわせて条里制による土地の区画整理が進み、「三十坪」など地名にも名残が残っています。

飛鳥時代：天智天皇の遷都視察

668年5月 天智天皇、大海人皇子、大友皇子、中臣鎌足、額田王ら蒲生野で業狩り
670年12月 「蒲生郡置込野(ひさの)」にて遷都の視察を行う(日本書紀)
(現在の十禅師一帯と言われる)

※672年1月に天智天皇が崩御していなければ「必佐原」の可能性も？




奈良時代：律令体制と条里制

・唐を模範に刑法「律」と行政法律「令」を整備。地方は「国・郡・里(郷)」に。蒲生郡の構成(郷)：東生・西生・必佐・篠田・篠筒・大島・松木・安吉・桐原

・「条里制」土地区画法
三十坪・仁正寺(二条地)
○坪や漢数字の小字名

条里制は地域密着の大規模開発。千年前の人々の尽力であった土地区画が、今日までつながっている。



惣村自治：自分たちで決め、自分たちで守った歴史

鎌倉末期から室町期にかけて、現在につながる集落の原型が形づくられました。

社会が混乱し戦乱が続いた時代、人々は集住し「惣村」を形成し、村の掟（惣掟）をつくり、自治を強めました。近江は惣村自治が特に強かった地域として知られます。

今の村落の起源が形成

150箇所以上の遺跡（集落、館、竈、寺院、古墳、古墓等）

→掘立柱建物の集落が飛躍的に増加

鎌倉室町期の石造宝篋印塔が多数存在

(中山、北郷、寺尾、西明寺、十津師、村井、中在寺、鎌掛、藤田、小御門、内池、北郷、別所、大塚、石原、香野、里口、棚田、川原、上野田、本津原)

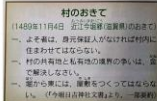
→鎮守 村堂を氏神氏寺とする集落の象徴

鎌倉末期-室町期(1200~1400年頃)に
現在につながる集落が形成されていく



惣村と自治

鎌倉後期、室町前期にかけての社会の混乱に伴い、分散していた百姓らが集住して惣村を形成。惣村は荘園領主や地頭・守護の支配下にあったが、権利主体として支配者に要求を行い自治権を強化。支配者側も惣村の了解なしには法令を發布できない状況も。今堀郷地下掟のように惣掟も作られ、**近江国は惣村自治が強まる。**



非領国の日野：分散統治が「自治の力」を育てた

江戸時代の日野は、幕府領・藩領・旗本領などが入り組む「非領国」となり、領主がたびたび入れ替わりました。強固な支配がない一方で、地域が自分たちで運営せざるを得ず、結果として自治が発達した私はここに、日野の強さの背景があると思っています。

江戸時代の日野 多くの領主「非領国」

「非領国」政策
と権力分散政策

幕府領、仁正寺藩市橋家、彦根藩井伊家、甲府藩徳川家、尾張徳川家、旗本領、相給地など

領主は度々入替り
→強固な支配がなく
領民の自治が発達



江戸時代の領主変遷

例

【河原】 幕府領→松山藩→淀藩→館林藩→甲府藩

【上迫】 旗本湫間(ぬま)氏→幕府領→旗本佐野氏→宮川藩

【鎌掛】 幕府領→甲府藩徳川家→棚倉藩小笠原家

【安部居】 彦根藩井伊家

【西明寺】 旗本湫間(ぬま)氏→幕府領→鳥羽藩→浜松藩

自治会と戦争：統制の道具になった苦い経験

昭和期、部落会・町内会・隣組が制度化され、配給・防空・監視などを担い、自治組織が国家統制の道具となった時代がありました。

終戦後、占領軍により解散命令が出されますが、その後、講和条約発効を経て、自治会は各地で自主的に再結成されました。

なぜ自治会は再結成されたのか

それは、必要だったからです。
ゴミ、草刈り、葬式、祭り、火事への備え、お寺や墓の管理-自治会がなければ暮らしが成り立たない時代がありました。

根本の問いかけ：いま、自治会は必要か

ここで、皆さんと共有したい根本的な問いがあります。

「今の時代、本当に自治会は必要なのか」という問いです。

都市部では自治会が薄い地域もありますし、生活サービスが整った今、自治会がなくても「生きてはいける」面もあります。

自治会の現代的意義：生存から「幸福」へ

私なりの結論はこうです。

古代から昭和の中頃までは、自治会は「生存のための基盤」でした。

しかし現代は、自治会が自治会員の幸せ(wellbeing)につながるかが、意義の中心になるのではないかと。

自治会と戦争

昭和15年 政府は部落会・町内会を制度化。その下に「隣組」を置く。配給物資の割当、国債の消化、防空演習、思想の監視
自治組織は国家統制の道具に。

昭和20年 終戦。古領軍は町内会・部落会・隣組を禁止。

昭和22年 全国で町内会は解散させられる。

昭和27年 講和条約が発効。**全国各地で自治会が自主的に再結成**

昭和28年 町村合併促進法の施行

昭和30年 1町6村が合併して

今の日野町が発足



まとめ「自分達の集落は、自分達で運営する」

①古くからの定住と共同体

・人が集まりムラを形成。古墳、寺社、条里制など千年以上の営み

②惣村自治の伝統

・室町時代、近江は惣村自治が最も発達した地域

・自分たちでルール（惣控）を作り、自分たちで守った

③非領国ゆえの自立

・領主が度々入れ替わり、強固な支配がなかった

・頼れる権力がないから、自分たちで何とかするしかなかった

④厳しいからこそ、協力する

・戦乱の世も、領主不在も、戦後の禁止も乗り越えた

・人々は自らの意思で、再び集まった。

なぜ戦後、自主的に自治会が再結成されたのか

→(答え)「必要だったから」

ゴミは誰が集めるのか。草刈りは誰がやるのか。

葬式は誰が手伝うのか。祭りは誰が続けるのか。

火事が出たら？お寺は？墓の管理は？

(自治会が無ければ生きていけない時代)

【根本的な問いかけ】

今の時代にはたして「自治会」は必要か？

自治会の必要性とは

古代～昭和：自治会は生きるために必要なもの

↓

現代：自治会は必ずしも必要でなくなった

【自治会の現代的意義】

→自治会員の「**幸せ(wellbeing)**」
につながるかどうか

「幸せ」は人によって違う

- 【高齢者】 見守り・孤立防止・生きがい
- 【子ども】 地域での体験・ふるさとの記憶
- 【子育て世代】 子を見守る地域・親同士のつながり
- 【働き盛り】 災害時の安心・仕事以外の居場所
- 【移住者】 地域に溶け込む窓口・「仲間」になる場
- 【退職後】 新たな役割・社会参加の機会

自治会は「生存」から「幸福」の基盤へ

どうすれば自治会を幸福な場にできるか

幸せの形は人それぞれ

幸せの形は人によって違います。例えば、

- 高齢者：見守り・孤立防止・生きがい
- 子ども：地域での体験・ふるさとの記憶
- 子育て世代：見守りの目・親同士のつながり
- 働き盛り：災害時の安心・仕事以外の居場所
- 移住者：地域に溶け込む窓口・仲間になる場
- 退職後：新たな役割・社会参加の機会

自治会は「生存」から「幸福」の基盤へ—ここに転換点があると考えています。



3. アンケート調査および意見交換会のまとめ (榎農楽)

本日ご紹介する冊子について

本日は、会場でお配りしている冊子『いま、私たちができること 2025』の概要をご紹介します。
アンケート調査と意見交換会で見てきたことを整理し、これからの自治会について話し合うための「材料集」としてまとめたものです。



なぜ、アンケートと意見交換を行ったのか

町長のお話にもあったとおり、いま自治会は過渡期にあります。

だからこそ、それぞれの自治会が「これから」を話し合う材料が必要だと考え、アンケートと意見交換会を実施し、その結果を冊子にまとめました。

「自治会(自治)」の出発点は「考えること」

自治とは、みんなで考え、みんなで決め、みんなで担うことです。

そのための前提として、まず「考える」ことが大切です。今回の冊子は、そのための材料として作成しました。



アンケートで見えてきた「町全体の共通した実感」

アンケートの取りまとめから、町全体として共通する実感が見えてきました。

- 行事・役割の負担が大きい
- 役員のなり手不足が深刻
- 目的が分からないまま続いている行事がある

これは一部の自治会だけの問題ではなく、町全体に共通する構造的な課題として整理できます。

データが示す現実：「今までどおりでは支えきれない時代」

人口や世帯などのデータからも、現実がはっきり見えてきます。

- 人口は減り続けている
- 世帯数は増えている(=1世帯あたり人数は減少)
- 「家庭で支え合う力」も「地域で助け合う力」も弱くなっている

この状況の中で、今までどおりの自治会運営は成り立ちにくいことが数字からも示されています。

意見交換会で見た本音:「変えたい、でも壊したいわけじゃない」

意見交換会では、アンケートでは拾いきれない現場の本音が多く出てきました。

- 自治会は大事だと思っている
- できれば続けたい
- でも、今のやり方のままではしんどい

「なくしたい」のではなく、「続けるために見直したい」という思いが、多くの地域で共有されていました。

冊子で大切にしたい視点:正解は示さない、でも考える軸は示す

この冊子は、行政が「こうすべき」と示すものではありません。

自治は、地域の皆さん自身が決めるものだからです。

そのため、冊子では

- 正解は示さない
- モデル自治会を押しつけない
- ただし、判断のヒント(考える軸)を整理する

という姿勢を大切にしました。

考えるためのヒント(例)

冊子には、各自治会が「自分たちならどこからできそうか」を話し合うためのヒントを整理しています。

- 行事を「減らす」「重ねる」「連携する」
- 役割を「軽く・短く・分ける」
- 「考える場」と「運営する場」を分ける など

「いま、私たちができること」から

この冊子のタイトルは『いま、私たちができること』です。

10年後、20年後を見据えつつも、求めているのは大きな改革ではありません。

できることを、できる人が、できるときに。

その一歩を、それぞれの自治会で考える材料として、今日のフォーラムを契機に活用していただければと思います。

それでは続いて、5つの自治会の取組紹介に移ります。よろしく願いいたします。

4.事例紹介 進行:株農楽

自治会は「役が多くてしんどい」という面もありますが、本来は、地域で夢を語り合い、暮らしを良くし、「この地域ってええな」と思える場でもあります。
今日は、5つの自治会の取組を通して、自治会を「続けるための工夫」や「関わりを広げる仕掛け」を学ぶ時間になりたいと思います。

- 河原:自治会を「一度立ち止まって見直す」
- 上迫:役員以外も関われる「ゆるやかな参加の仕組み」
- 鎌掛:「運営」と「考える」を分ける体制づくり
- 安部居:データ(根拠)をもとに将来を考える
- 西明寺:暮らし・農・人の関係性を大切にし、移住者も含めて関わりを育てる



■河原自治会 ～自治会を一度立ち止まって見直す～

高井儀浩氏、増田美佐代氏



河原自治会 ～自治会を一度立ち止まって見直す取り組み～

1. 背景

新旧住民がほぼ半数づつであり、今後新住民が役員を担う中で経験不足などからの困りや自治会運営が「立ち行かなくなる」危機感

- ・ 仕組みや規約、行事など、自治会運営全般が分かりにくいとの声が多い
- ・ 行事や慣例が「なぜやっているのか分からないまま続いていく」

2. 検討・体制

「河原自治会運営改善会議」の設置

- ・ 自治会の将来を見据えた検討組織
 - ・ 期間を区切った2年間の改善プロジェクト
 - ・ メンバーは自治会役員ではなく、新旧・男女・年齢のバランスに配慮
 - ・ 子どもを含めた住民アンケートに基づく課題に対する議論
- 「より良い河原」「分かり易い自治会運営」「みんなが仲良く暮らせる」という暮らし目標の自治会運営を目指す

3. 取り組み内容

(1)見える化

- 役割・仕事の整理・明文化
- 係・団体の位置づけを明確化
- 「知っている人だけ」から「誰が見ても分かる」自治会へ

(2)負担軽減

- 役職集中の回避
- 新規役員が入りやすい環境
- 向こう5年間の区三役選任
- 「できる人ができる範囲で支える」

(3)行事整理

- 行事の棚卸しと再検討
- 「本当に今の河原に必要か」
- 簡素化と役割分担の見直し
- 「続けるために変える」判断

(4)行政制度活用

- 自治会内の「まるごと事業」の位置づけの明確化
- 美化活動や景観づくりを補助制度と連動
- 継続可能な活動として整理

(5)河原自治会運営ハンドブックの作成

- 誰でも情報を共有できる
- 新規住民への説明に活用
- 役員の引継ぎに活用



4. 考え方



- ・ 「昔から」の考え方に距離を置く
- ・ 合意形成を重ねながら段階的に改善
- ・ 自治会は「安心して暮らすための手段」
- ・ 完璧を目指さず、2年間でできることに集中

5. ポイント



- ・ 「一度立ち止まって」見直す勇気
- ・ アンケートを基に自治会運営全般についてまとめて議論することの大切さ
- ・ ルールや仕組みの整理だけでも参加しやすくなる
- ・ 特別な人がいなくても、話し合いで自治会は変わる

なぜ「自治会の将来を考える場」が必要だったのですか？

河原は、旧住民と新住民がほぼ半数ずつという特徴があります。

これから新住民の方が役員を担う時期に入り、仕組みや運営が分からないまま役を引き受けると、結果として新旧が分かれてしまう危機感がありました。

住民アンケートで「一緒にやりたい」という意向も強く、自治会運営を見える形にして共有する必要があると考えました。

「河原自治会運営改善会議」と自治会本体の関係は？

現役役員に負担を押し付けないため、役員ではない住民が中心になって設置しました。新旧・男女・年齢層のバランスにも配慮しています。

ただし改善会議が”二重権力”にならないよう、2年間の期間限定プロジェクトとして位置づけました。

どんな見直しを行いましたか？

できるところから具体的に改善しました。

- 班編成の見直し(居住実態に合わせ再編)
- 環境整備の日程変更(暑さを避ける)
- 自治会費の納入方法の見直し(一括納入の拡充)
- 行事や規定の簡素化・明文化(冠婚葬祭等)
- 役員体制の見通し(向こう5年間の三役選任を整理)
- ハンドブック作成(新規加入者・引継ぎに活用)

他地区へのメッセージは？

こんな学び合いの場が継続すると良い。

互いの取組を見て「教えてほしい」と思えること自体が前向きな一歩。

3世代が自然に関われる場を、できる範囲で続けたい。

■上迫自治会 ～役員以外の住民が関われる仕組みづくり～

安井範雄氏、正親肇氏



上迫自治会 ～役員以外の住民が関われる仕組みづくり～

1. 背景

人口減少・高齢化の進行により自治会役員が「運営のすべてを担う」ことへの限界があり、役員ではない住民も関われる仕組みを模索

- ・ 役員の担い手不足
- ・ 農地の耕作放棄、環境管理の困難化
- ・ 独居高齢者の増加や災害時の見回り対策

2. 検討・組織づくりのプロセス

「上迫の未来を考える会」の設立(約6年前)

- ・ 区長への「諮問・提言組織」
- ・ 男女バランスを考慮した約10名、2年任期制
- ・ この会で「役員以外にも地域に関われる人材は多い」という認識を共有

「上迫地域活性ボランティアの会」の設置

- ・ 役員・行政・個人の中間に位置する地域公認ボランティア組織
- ・ 「できることを、できる人が、楽しくやる」
- ・ 強制しない、負担をかけない、自主性重視

「麻雀クラブ」の設立

- ・ 中学生の一言から、地域の有志が設立、運営

3. 取り組み内容

上迫地域活性ボランティアの会

(1) 防災×交流

- 「かまどベンチ」作り
- ・ フリーマーケット出店による資金作り
- ・ 住民によるレngaへのメッセージ書き(1口100円)
- ・ 災害時の炊き出しだけでなくBBQへも活用「つくる過程」が交流の場となり、高齢者から子どもまで多くの住民が関与

(2) 見守り・助け合い声かけ部隊構想

- ・ 独居高齢世帯への定期的な声かけ
- ・ 災害時の安否確認体制作り
- ・ 区長・民生委員との連携を想定
- 「非常時だけでなく日常時からの関係づくり」を重視した次の展開として検討中

麻雀クラブ

(3) 多世代交流

- ・ 中学生の「麻雀強くなりたい」の一言から住民有志が設立、運営
- ・ 毎月第3日曜日に定期開催
- ・ 男女比率は半々、50～70代を中心に中高生～90代まで幅広く参加
- 世代間交流・認知症予防・日常的な見守りにつながっている

4. 考え方



- ・ 役職や義務ではなく自主参加
- ・ 「無理なく・楽しく・続けられる」ことを優先
- ・ 反対意見も関心の現れ
- ・ 成功・失敗しながら調整する姿勢

5. ポイント



- ・ 役員以外の住民が活躍できる仕組みづくり
- ・ 防災・交流・見守りを「別々にしない」発想
- ・ 小さな行動を積み重ねることで生まれた安心感
- ・ 中学生の一言から取り組みが始まった

なぜ「役員だけが担う運営」に限界が出たのですか？

世帯40戸、人口113人、高齢化率57%。

これまで当たり前できていた行事や活動が限界に近づきました。

その中で約6年前に「上迫の未来を考える会」をつくり、提案を積み重ねてきました。

「上迫地域活性ボランティアの会」とは？

役員でなくても参加できる、ゆるやかな自主参加の場です。

強制せず、負担をかけず、地域にも”公認”してもらい、長く続けられる形を意識しています。

中学生発案の「麻雀クラブ」は、どう広がった？

中学生の「麻雀が強くなりたい」の一言がきっかけです。

毎月第3日曜日に定期開催し、LINEで連絡。中学生から92歳まで、男女半々、月20人程度が参加し、世代を超えた交流・見守りの場にもなっています。

他地区へのメッセージは？

無理なく、楽しく、今の現状に合う形に見直しながら続ける。

やらされ感ではなく、「安心して暮らし、安心して最期を迎えられる地域」を目指す。

そのために声を出しにくい人も含めて居場所をつくる。

■鎌掛運営会 ～運営と検討を分けた仕組みづくり～

平尾義明氏、居永威王氏



鎌掛運営会 ～運営と検討を分けた仕組みづくり～

1. 背景



人口減少と高齢化により従来の組織運営が困難に
 将来の不安を語るだけでは地域は前に進まないため、「今の運営をどう続けるか」と「これからをどう考えるか」を分けて整理することが必要

3. 考え方

住民アンケートを起点とした議論

- ・ 18歳以上の全住民対象
- ・ 回収率80%
- ・ 結果は住民に共有

結論を押し付けない進め方

結論を示すのではなく、アンケート結果や論点を提示し、各組織・団体が自主的に判断して見直す流れが生まれている

人口減少を否定せず、流れの中で暮らしやすさを維持・向上させる地域運営を目指す

2. 検討・体制

鎌掛運営会（運営を担う組織）

構成：各自治会会長等
 役割：最終的な判断・決定

↑ 提言

鎌掛の未来を考える会（むらを良くする会）

構成：前区長（任期二年）
 役割：検討・整理・提案に特化（決定権はなし）

- ・ 住民アンケート調査の将来課題に対する具体的なアクションの検討
- ・ 検討結果を鎌掛運営会に提言

4. 具体的な成果や取り組み

役職・負担構造の見直し

（不参料廃止、常会廃止、役職削減など）

組（隣組）の再編

（持続可能な運営単位への移行）

女性の役員登用の促進

対話を重ねる

（地区内の団体との懇談会）

情報発信

（広報紙やホームページを活用した、活動状況や検討状況の見える化による、住民が意見を出しやすい環境づくり）

5. ポイント

- ・ 「運営する組織」と「考える組織」を分けた体制
- ・ 住民アンケートという客観的な共通の土台に基づく見直し
- ・ 結論を押し付けず、各組織・住民の自主的な判断を促すプロセス
- ・ 任期2年制による、担い手固定化を避けた継続的な見直し体制

鎌掛の課題は何でしたか？

人口減少と高齢化が進み、将来の担い手が減るのに組織や役が多い。
約45組織、延べ350人の役員という状況で、将来は役員と人口が近づく懸念がありました。

「運営会」と「未来を考える会」を分けた狙いは？

- 鎌掛運営会＝最終判断・決定を担う
- 鎌掛の未来を考える会＝検討・整理・提案に特化（決定権なし）
という役割分担です。住民アンケートを土台に議論を進めています。

具体的に進んだことは？

役職・負担構造の見直し、組（隣組）の再編、団体との懇談、広報やHPでの見える化など、対話と情報共有を重ねています。

他地区へのメッセージは？

アンケート内容など、知りたい方は気軽に運営会の事務所へ。

対話の機会を増やし、できることから進めたい。

小さな地区でも、頑張りは町や日本の未来につながると信じている。

■安部居区自治会 ～データをもとに将来を考える～

川原正志氏、川原正也氏



安部居区自治会 ～データをもとに将来を考える取り組み～

1. 取組の位置づけ・背景

- 少子高齢化や人口減少といった避けられない構造変化を前提に、「将来が不安だ」という議論に終始するのではなく、減っていく中でも暮らしやすい地域をどうつくるかを考える取組
- 自治会とは別に、検討・整理・提言を専門に行う組織として「2030プロジェクト」を立ち上げ
- 「出ていった人が、いつか戻りたいと思える安部居」を一つのイメージとして共有

2. 検討・体制

「2030プロジェクト～未来への架け橋」

- 男女各3名とオブザーバーとして区長、副区長の体制で活動
- メンバーである元区長が庶務・代表的役割を担う
- 自治会とは別の組織であり、「役だからやる」ではない自由な議論、重たいテーマにも取り組める場を確保
- 遠い将来ではなく、今の世代が実感できる近い将来を見据えることを重視
- 会議は月1回・約1時間半

3. 考え方

(1) データ(根拠)重視

思いつきや感覚論で議論しないため、客観的なデータを用いる

- 人口ピラミッド
- 草刈り面積の測定・可視化
- 年齢構成と役負担の関係整理

(2) 匿名性を確保した意見集約

意見はUSBメモリを提出し筆跡を隠し、パソコンで一覧表示。メンバー間でも誰の意見かわからない状態での会議などの工夫

4. 具体的な成果

(1) 草刈り負担の軽減

草刈り面積に対する地域の実働人員を整理し、不足する人員を補う方法を模索する中で、自警団による除草剤散布の協力や年3回の総出と組み合わせた、作業量調整を実現

(2) 宮守(神社管理)制度の見直し

神社管理(2社)の担い手が若年層に回り、将来の継続が困難になる恐れがあったことから、固定で担当する人員を確保し、固定担当制と交代制を併用し、担当年齢が是正され、安定的な運営見直しを確保

5. 進行中の取り組み

- 中学生以上対象の全住民アンケート 約140名
- 書きやすさを重視
- 記述式回答を多く設定
- 世代別・立場別の本音を把握し次の検討テーマを設定する

6. ポイント



- 自治会とは別に「考えるための組織」を作る
- 感覚論ではなく、データに基づく話し合いを行う姿勢
- 草刈り・宮守といった身近な課題から成果を生み出す

なぜ「2030プロジェクト」を立ち上げたのですか？

少子高齢化を止めること自体は自治会では難しい。
だからこそ、流れを前提に、減っていく中でも幸せに暮らせる体制を準備するために立ち上げました。

なぜ2030年(5年後)を目標に？

遠い未来は他人事になりやすい。
5年後なら当事者として実感でき、振り返り・検証もできる。
2030年を「未来への架け橋」としてマイルストーン(重要な節目)にしました。

自治会の中での立場は？

決定権は持たず、調査・研究・根拠資料の準備を行い、組長会や総会などの決定機関へ提案する立場です。

他地区へのメッセージは？

主観ではなく客観(データ)で話す。会議時間の短縮にもなり、振り返る資料にもなる。
「生存から幸福へ」。住民それぞれの幸せにつながる自治会を目指したい。

■西明寺自治会 ～暮らし・農・人の関係性を大切に～

澤村金造氏、山下江津子氏



西明寺自治会 ～暮らし・農・人の関係性を大切にしたい取り組み～

1. 背景・問題意識

- ・ 人口減少・高齢化による農地維持・担い手不足の危機感
- ・ 無理して従来型の運営を続けるのではなく、本来の目的（暮らし・農・関係性の維持）を重視する
- ・ 約20年前の移住者の受け入れをきっかけに、制度や考え方を柔軟に対応し「農業を基盤にした関係づくり」や「移住者の受け入れを軸とした地域づくり」に取り組まれている

2. 農業を基盤にした関係づくり

(1) 営農組合と米づくり希望者の連携

米づくりを希望する移住者や地区外住民をサポート

- ・ 農地の紹介(当面、営農組合扱いで耕作)
- ・ 農業機械の利用(運転講習)
- ・ 田植え・稲刈りなどの共同作業を実施

(2) 農業参加の仕組み

- ・ 初期投資なしで米作りが可能
- ・ 日常管理(草刈り・水管理)は個人責任
- ・ こだわった米づくりも可能。必要に応じて営農指導
- ・ 収穫した米は各自が自由に販売・活用
- ・ 必要経費(肥料や機械利用料などの実費)のみ負担する仕組み

(3) 交流の場としての農作業

- ・ 田植え・稲刈り時の休憩時間が世代間交流の重要な場
- ・ 家族参加も多く、自然な関係性が育まれている

3. 移住者の受け入れを軸とした地域づくり

(1) 移住の実績

- ・ 定住移住者5戸(うち米づくり3戸)
- ・ 米づくりなど人のつながりを通じた「自然な流入」が基本

(2) 受け入れ時の工夫(ハードルを下げる仕組み)

- ・ 事前に自治会情報の説明会を行う
- ・ 自治会入会金なし、自治会費は試行期間(半年～1年)は免除
- ・ 自治会活動と宗教行事は明確に区別し、参加・負担は任意
- ・ 共同作業は個人の体力・得意に応じた役割分担
- ⇒ 「入る前から負担が見える」状況をつくらない・必要な情報の公開を重視

(3) 空き家への考え方

- ・ 不動産業者任せにせず、地域内で出来る限り事前情報を共有・調整
- ・ 「売ればよい」「別荘化」ではなく、定住を重視すると共に地域の一員として地域と関わる人を重視
- ・ 人をよく知った上での受け入れを基本とし、無秩序な流入を防止

4. 自治会運営の工夫

役員選出の方法

選挙制ではなく、推薦委員会方式

- ・ 区長経験者等で構成、事前の概回しなし、総会当日に発表
- ⇒ バランスと継続性を重視した人選を行うため、選出の責任は重いが長期的な視点での自治会運営について検討できる仕組み

5. 新たに取り組んでみたいこと

- ・ 「西明寺版SDGs」の構想
- ・ 環境(農・水・エネルギー)を軸にした集落の将来像づくり
- ・ 「西明寺塾」構想(若い人に将来をしっかりと担ってもらう)
- ・ 歴史・文化・自治会・山林・田・農業技術などの記録と伝承口伝から「記録」への転換
- ・ 農と暮らしを基盤に、「無理なく人が関わり続けられる集落」をめざす

6. ポイント

- ・ いきなり制度を変えなくても「ハードルを下げる」、「得意を活かす」、「農や日常作業を媒介に関係を作る(関係人口の拡大)」ことで持続的な地域運営は可能
- ・ この取り組みは「正解モデル」ではなく、地域の条件に合わせた一つの実践事例である

移住者受け入れの前に、何が課題でしたか？

人口減少・高齢化で、農地維持、共同作業、伝統活動などの継続が難しくなっていました。

人口そのものが減ることが、運営上の大きな課題でした。

受け入れで大切にされた考え方は？

別荘化ではなく定住を重視しつつ、無理のない距離感で「一緒に暮らせるか」を大切にしました。

自治会情報を事前に伝え、行事や活動を通じて徐々につながる形を意識してきました。

移住者側から見た「よかったこと」は？

最初から全部やらなくていい、分からないことは聞けばいい、と声をかけてもらえた。農業も含めて、地域と一緒に考えてくれたことが温かかった。

農業参加はどのように支えている？

営農組合が農地紹介や機械面のサポートを担い、希望者が”田んぼ一枚”から始められる形にしています。

若い人の「やってみたい」を受け止め、関係人口として関わりが続く流れが生まれています。

他地区へのメッセージは？

すぐになじまなくても、行事参加がきっかけになる。

ライフスタイルの違いも理解し合い、少しずつ寄り添うことが大切。

ハードルを上げすぎず、関わりのお機ををつくる。懇親会など”場”が関係を育てる。

■「西明寺山の音楽隊」



♪夕日がとても綺麗だね 西明寺ポジティブバージョン

毎日楽しいことばかり
見守りや助け合い
そんな暮らしになりたくて
いつもあれこれもがいてる

夕日がとても綺麗だね
気持ち晴れて癒される

何があっても常に前向き
転ばぬよう手を取って
きつい坂道息を弾ませ
みんなで散歩しましょうか

日に日に世間が変わってく
気のせいかなそうじゃない
みんなの思いが繋がって
明るい未来が見えてくる

どんなことにも動じない
いつも元気なワンチーム

水と緑と人のつながり
これが田舎の生きる道
お茶とお菓子を丸く囲んで
あしたの夢を語ろうよ

猿やイノシシ鹿も出てくる
それでもみんなの故郷よ
若い力と思うところで
あしたに向かい歩こうよ
おいしいお米食べようよ

5.個人ワーク・意見交換・発表

■個人ワーク、意見交換



■個人ワーク

進取のまちづくりフォーラムでは、事例紹介を聞くだけでなく、参加者一人ひとりが考え、周囲と語り合う「個人ワーク」の時間を設けました。

参加者は、1)本日の発表を聞いて感じたこと、2)自分の地域に当てはめて考えたこと、3)これから地域で取り組みそうなことをワークシートに記入し、その後、近くの参加者同士で意見交換を行いました。

そこから見えてきたのは、地域ごとに状況は違っても、共通する悩みと希望があるということでした。多くの声の根底にあったのは、「地域は続けたい。でも今のままでは続かない」という率直な思いでした。

個人ワークで寄せられた声から、地域づくりのヒントとなる20のポイントを整理しました。

個人ワークで見えてきた20のポイント

01 地域は続けたいという思い

「自治会は必要だと思う」「できれば続けたい」多くの人が地域のつながりを大切にしたいと感じています。

02 しかし今のままでは負担が大きい

役員や行事の負担が重く、「このままでは続けるのが難しい」という声も多くありました。

03 最初の一步が踏み出せない

「何かしないといけないとは思う」しかし、「どう始めればよいかわからない」という声も少なくありませんでした。

04 事例から勇気をもらった

他地区の取組を聞き「自分たちの地域でもできるかもしれない」という前向きな気持ちが生まれました。

05 アンケートは有効な方法

住民の声を集める方法として「まずアンケートをやってみたい」という意見が多くありました。

06 データで考える大切さ

人口や世帯の変化など「数字を見て現実を共有することが大切」という気づきがありました。

07 引っ張る人の存在

地域の変化には「声を上げる人」「まとめる人」の存在が重要だという意見がありました。

08 無理をしない仕組み

続けるためには「できる人が、できるときに関わる仕組み」が必要だという声がありました。

09 役員だけに任せない

役員だけが背負うのではなく「みんなで少しずつ関わる地域」にしたいという声がありました。

10 世代を超えた地域づくり

若い世代と高齢世代が知恵を出し合うことが大切だという意見が多くありました。

11 若い世代が住み続けたい地域に

「若い人がこの地域に住みたいと思えるか」という視点の重要性が語られました。

12 地域の魅力を見つめ直す

農地や自然、祭りなど地域の価値を改めて見つめ直す必要があるという声がありました。

13 行事の意味を考え直す

「なぜやっているのか」を考え必要なものを見極めることが大切だという意見がありました。

14 負担軽減の本質

負担を減らすためには「やめる」だけでなく、仕組みを変えることが必要だという学びがありました。

15 小さく始める

大きな改革ではなく「できることから始める」という考え方が共有されました。

16 対話の場の重要性

地域の課題は「話し合うことで見えてくる」という声がありました。

17 地域の未来を共有する

将来の姿を共有することで、地域の方向性が見えてくるという意見がありました。

18 任期を越えたつながり

役員が終わっても、「次の世代へつなぐ役割」が大切だという声がありました。

19 地域の幸せを考える

自治会の目的は、「そこに暮らす人の幸せ」であるという意見がありました。

20 まず一つ変えてみる

「地域に帰ったら何か一つ提案してみたい」という前向きな声が多く聞かれました。

対話から始まる地域づくり

個人ワークと意見交換を通して見えてきたのは、地域の課題の多くは、誰もが感じている。しかし共有されていない。ということでした。

今回のフォーラムでは、「書く → 話す → 共有する」というプロセスを通して、地域の課題や可能性が少しずつ言葉になりました。

自治会の未来に「正解」はありません。しかし、1)対話すること、2)互いの経験から学ぶこと、3)できることから始めること。その積み重ねが、地域の未来を形づくっていきます。

今回のフォーラムが、それぞれの地域で、「まず一歩、考えてみる」きっかけになれば幸いです。

■発表

世代を超えて集落を守るという視点

今の時代、若い世代と高齢世代が共存することは、決して簡単ではありません。私自身も若い世帯と共に暮らしていますが、お互いに理解し、時には我慢もしながら暮らしていくことが大切だと感じています。

集落も同じです。若い人と年配の方が知恵を出し合い、田畑を守り、地域を守っていくことが必要だと思います。

正直に言えば、私たちの地域では、昔ながらのやり方からなかなか脱却できず、前に進みにくい状況があります。しかし本日の発表を聞き、各地域が困難を乗り越え、努力を重ねて今に至っていることに深い敬意を感じました。

私自身も農村振興に関わる立場として、「この地域に住んでよかった」と若い世代が思える集落にしたいという思いを持っています。

本日のような場を行政が設けてくださったことに感謝するとともに、ぜひ継続していただきたいと思います。

また、本日参加されていない地域にも、この事例報告を共有し、日野町全体で学びを広げていくことが大切だと感じました。ぜひ資料の送付・共有をお願いしたいと思います。

最初の一步をどう踏み出すか

発表も演奏も、どれも素晴らしかったです。

町長の最初のプレゼンも非常に分かりやすく、もっと詳しく聞きたいと思いました。

私の地区も、小学生以下が1人という状況で、将来への不安を抱えています。「限界集落」という言葉が頭をよぎることもあります。

何かやらなければと思いつつも、

- 最初の一步が踏み出しにくい
- 手間がかかるのではないかな
- うまくいかなかったらどうしよう

と、二の足を踏んでしまう気持ちも正直あります。

しかし本日の発表から、

- アンケートという切り口
- データという土台
- 引っ張る人の存在
- 「やらされ感」ではない姿勢
- ハードルを下げる工夫

といった多くのヒントをいただきました。

うまくいくかどうかは分かりませんが、「何か一つ、投げかけてみる」そこから始めてみようという気持ちになりました。

自分たちの幸福のために、まずできることを考えてみたいと思います。ありがとうございました。

負担軽減＝事業削減ではないという気づき

5団体の発表を通して、共通点が見えてきました。

それは、

- 大人から子どもまで話し合っていること
- 役を終えた人が次の世代のために考え続けていること
- 役員がポジティブに行動していること

です。

自治会では「負担軽減」という言葉がよく出ます。そのとき、「事業を減らそう」「やめよう」という発想になりがちです。

しかし今回の事例では、事業を減らすことが目的ではなく、仕組みや担い方を変えることで負担を軽くしている。そこが大きな学びでした。

また、区長や自治会長の任期が終わると、「やれやれ」と次に任せてしまいがちですが、自分が解決できなかった課題を、次につなぐ”橋渡し役”であることも大切だと感じました。

まとめ

本日の意見発表から見えてきたことは、

- 世代を超えて知恵を出し合うこと
- 最初の一步を踏み出す勇氣
- 負担軽減の本質は「やめる」ことではなく「変える」こと
- 任期が終わっても次へつなぐ姿勢

だったのではないかと思います。

今日の空気が、「自治会に帰って、何か一つ変えてみよう」という雰囲気につながっていれば幸いです。

6.総括 安田教育長

皆さん、こんにちは。本日は大変素晴らしいフォーラムを開催していただき、本当にありがとうございました。

申込みの段階ではどのくらいの参加になるかと思っておりましたが、結果として160名もの皆さんにご参加いただき、大変盛況なフォーラムとなりました。心より感謝申し上げます。

西村さん、長時間にわたりコーディネートいただき、ありがとうございました。

また、事例発表をいただいた5地区10名の皆さま、本当にありがとうございました。

西明寺の皆さんの演奏も素晴らしかったです。



今日のキーワード

本日の内容を振り返りながら、私なりにキーワードを整理していました。

西村さんにまとめていただいた材料集『いま、私たちができること2025』では、

- 見通す
- 知る
- 聴く
- 分かち合う
- 話し合う

という5つの視点で整理されています。

これは、これからの自治会運営において、本当に大切な姿勢だと改めて感じました。

5つの地区から学んだこと

本日発表いただいた5つの地区の事例から、それぞれ大切な視点を学ばせていただきました。

- 河原自治会
「見通す勇氣を持つ」こと。立ち止まり、運営を見直す姿勢。
- 上迫自治会
「つながりをつくり出す」こと。中学生の声から始まった麻雀クラブは象徴的でした。
- 鎌掛運営会
「改善のための仕組みをつくる」こと。運営と検討を分ける仕組みづくり。
- 安部居区自治会
「根拠に基づいて幸せを考える」こと。エビデンスをもとに区民の幸福を追求する姿勢。
- 西明寺自治会
「寄り添う、関わり合う雰囲気づくり」。まずはハードルを下げることから、という提案。

どの地区にも共通していたのは、まず始めること、行動を起こすことでした。

その一歩が、希望につながるのだと感じました。

「もっと知りたい」という広がり

今日の発表を聞きながら、
「そのハンドブックを見たい」
「アンケートの中身を知りたい」
「役員選出の方法はどうしているのか」
「班編成はどうしているのか」
「会議はどう進めているのか」

など、さらに知りたいことが次々と浮かんできました。

こうした学びや疑問を、自治会同士でつなぎ、行政もお手伝いしながら、町全体へ広げていくことが、これからの展開だと感じています。

共有と発信

本日の材料集やスライド資料は、町のホームページにも掲載される予定と聞いています。今日気づいたこと、学んだことを、ぜひそれぞれの地域へ持ち帰り、1人でも多くの方と共有していただければと思います。

それが、日野町全体のより良いまちづくりにつながっていくはずです。

「聞くだけで終わらせない」工夫

本日の進行で特に印象に残ったのは、

個人ワーク → ペアワーク → 発表 という流れです。

聞きっぱなしで終わるのではなく、自分の言葉でアウトプットする。

それによって理解が深まり、行動につながる。

これは、これからの自治会の会議運営にも活かせる大切な視点だと感じました。



7.閉会あいさつ 安田副町長

本日は、長時間にわたりご参加いただき、ありがとうございました。大変有意義なフォーラムとなりましたこと、心より感謝申し上げます。

登壇いただいた皆さま、本当にありがとうございました。そして、「西明寺山の音楽隊」の皆さん、素晴らしい演奏をありがとうございました。会場の雰囲気を一気に温めていただきました。

今日の発表を聞いて、「自分たちの地域で、いきなりここまでできるだろうか」

と感じられた方もおられるかもしれません。

でも、最初から完璧な形を目指す必要はありません。



たとえば、「昨日、こんな話を聞いたけど、どう思う？」そんな一言から、数人で話し始める。それも立派な一歩です。

男性・女性・年齢バランスを整えて…と最初から構えなくてもよいのです。

まずは、気軽に話せる機会をつくることから始めていただければと思います。

今日、何度も出てきたキーワードは「幸せ」でした。

自治会の目的は、そこに暮らす皆さんの幸せ。町の目的も、まち全体の幸せ。目指すところは同じです。

来年度に向けて、自治会の皆さまからのご相談をしっかり受け止める窓口も整えてまいります。

それぞれの地域での取組を、町としても伴走し、支えていきたいと考えています。

どうか、自分たちの幸せのために。地域の幸せのために。

今日の学びを、それぞれの地域での一歩につなげていただければ幸いです。

本日は誠にありがとうございました。今後ともどうぞよろしく願いいたします。

8.フォーラムアンケートから見えてきたこと

進取のまちづくりフォーラムでは、参加者の皆さまにアンケート調査を実施しました。全参加者160に対し、回答数131と、多くの方からご意見をいただきました。回答内容からは、自治会を取り巻く共通の課題とともに、地域を良くしていきたいという前向きな思いが数多く寄せられました。

ここでは、アンケート結果から見えてきた主なポイントを整理します。

フォーラムの満足度：約9割が「満足」

フォーラムの満足度については、「とても満足」(41%)、「満足」(44%)となり、約85%の参加者が満足と回答しました。

特に多かった感想は、「他地域の取組を知ることができた」、「具体的な事例が参考になった」、「自治会の将来を考える良い機会になった」といったものでした。

また、「同じような課題を抱えている地域が多いことが分かった」という声も多く、地域同士が学び合う場としての意義が確認できました。

参加のきっかけ：地域からの情報が中心

フォーラムを知ったきっかけは、「組回覧」(35%)、「折り込みチラシ」(33%)が多く、地域内での情報共有が参加につながっていることが分かりました。一方で、町ホームページやメールなどのデジタル媒体はまだ割合が低く、今後は多様な情報発信の方法を組み合わせしていく必要性も見えてきました。

満足した理由：「他地域の事例が参考になった」

自由記述では、多くの参加者が「他地区の取組を知ることができた」という点を評価していました。

主な意見として、「他自治会の活動が参考になった」、「地域ごとの工夫が分かり勉強になった」、「自分の地域でも取り組めそうなヒントがあった」などの声が寄せられました。

また、「自治会の将来を真剣に考えている人が多く希望を感じた」、「同じ悩みを共有できた」といった感想もあり、地域同士の学び合いの重要性が改めて確認されました。

参加者が知りたい事例：地域の関心は「担い手」「参加」「持続」

アンケートでは、自分の自治会の課題を解決するために知りたい事例についても多くの意見が寄せられました。特に多かったテーマは次の通りです。

01 役員のなり手不足

役員選出が難しくなっているという声が多くありました。「役員の決め方」、「負担を減らす仕組み」、「役職の整理」などの事例を知りたいという意見が多くありました。

02 若い世代の参加

20～40代の関わりが少ないという課題も多く挙げられました。「若い世代が参加しやすい活動」、「子育て世代が関わる仕組み」、「楽しく参加できるイベント」などの取組への関心が高いことが分かりました。

03 自治会への参加促進

自治会活動に参加しない住民への対応についての悩みも多くありました。「自治会の意義をどう伝えるか」、「参加しやすい雰囲気づくり」、「新しい住民との関係づくり」などが重要なテーマとなっています。

04 空き家・人口減少への対応

人口減少に伴う地域の将来への不安も多く見られました。「空き家対策」、「移住者の受け入れ」、「農地や山林の維持」といったテーマについての事例を知りたいという意見がありました。

05 行事や役割の見直し

自治会活動の負担軽減について、「行事の見直し」、「役割の整理」、「会費や運営方法の見直し」などに関心が集まっていました。

アンケートから見えてきた3つのポイント

今回のアンケートからは、次の3つの重要なポイントが見えてきました。

① 課題は共通している

人口減少、高齢化、担い手不足など、多くの自治会が同じ課題を抱えています。

② 他地域の事例が大きなヒントになる

実際の取組事例を知ることで、自分たちの地域でもできることを考えるきっかけになります。

③ 地域を良くしたいという思いは強い

多くの回答から、「地域をより良くしたい」という前向きな思いが感じられました。

フォーラムをきっかけに

今回のフォーラムは、自治会の課題を共有し、互いに学び合う場となりました。

アンケートには「自分の地域でも取り組みたい」、「何か一つ始めてみたい」という前向きな声も多く寄せられています。

自治会の未来に決まった答えはありません。

しかし、「知ること」、「話し合うこと」、「できることから始めること」その積み重ねが、地域の未来をつくっていきます。

今回のフォーラムが、それぞれの地域で、「次の一歩」を考えるきっかけとなることを期待しています。



発行・問合せ
日野町 企画振興課
〒529-1698 滋賀県蒲生郡日野町河原一丁目1番地
TEL:0748-52-6552
E-mail:kikaku@town.shiga-hino.lg.jp